

言語コミュニケーション能力の発達をめぐって

——ミード理論と現代日本社会——

加藤 春 恵 子

はじめに

ことばによって意思を伝えあうということは、人間独自の営みである¹⁾。この営みを行なう力は、社会化の過程で獲得される。勿論、生まれながらに与えられている潜在的な可能性というものはある。しかし、それが実現し顕在化するための条件を用意するのは、社会であり、集団である。

現代日本社会は、言語コミュニケーションの能力の発達のための条件、という点からすれば、どのような問題をはらんでいるのだろうか？ G. H. ミードの理論を手がかりに考えてみたいと思う。

(1) ミードのコミュニケーション論

コミュニケーションの問題を扱った G. H. ミードの主著『精神・自我・社会』²⁾が日本で知られるようになってからすでに久しい。特に、マス・コミュニケーション研究の行きづまりが問題にされるようになってから、コミュニケーション理論の古典としてのこの書に注目する動きはあちこちにみられた。また、近年では社会学理論の新潮流の一つであるシンボリック・インタラクショニズムの原点としてこの書に着目する人々も増え、訳書も改めて刊行された³⁾。

この間に私自身も、何度かミードの枠組を紹介する機会を与えられた。しかし、当時私は、まだ、理論を学ぶということ、いささか自己目的化していた。従って私のミード紹介は、自らの生きる社会を理解するための手がかりを得るための作業

なのだ、という実感に支えられていなかった。そのため、彼の理論をわかってという努力も不徹底で、ミードのことばの端々を寄せ集めて十分こなれない訳語をもって紹介し、簡単に評価を下そうとする傾きがあった。勿論、いまま十分な理解に到達したなどとはとてもいえない。ただ、自分の生きる社会とそのなかでの個人の在り方について内在的な問題意識をもち、真剣にその考察にとり組もうとする者との出会いがあるとき、時間と空間を超えて考えるヒントを与え続けてくれる理論だ、ということが少々わかりかけてきたばかりである。

ミードの提示した概念は、曖昧で、しかも示唆に富み、われわれの思考を刺激する。彼の後継者をもって任ずるシンボリック・インタラクショニズムの指導者 H. ブルーマーは、自分たちの使う概念は、definitive concepts ではなく、sensitizing concepts だと述べている⁴⁾。前者が何を考察すべきかを明確に指示するのに対して、後者はどんな方向に目を向ければいいのかということを大まかに示唆するのみである。しかしながら、その示唆を通して、それらの概念は人々の心感受性豊かなものにし、現実の一側面を鮮やかに撮しとるきっかけを与えるのである。ミードの概念はまさに、その代表例といえると思う。

さきにも触れたように入手の容易な訳書もあり、紹介もある⁵⁾ので不要とも思われるけれども、社会学以外の専門の方々にも読んで頂くために、まず、ここで使いたい概念について説明しておく

- 1) 「動物のことば」というように、「ことば」という語はコミュニケーション、あるいはその手段と等置され、拡大定義されて使われることがある。しかし、ここでは、本来の意味のことばを問題にしている。
- 2) G. H. Mead, *Mind, Self and Society*, 1934, The University of Chicago Press.
- 3) 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』現代社会学大系 第10巻、青木書店、1973。なお、1941年に出た訳書として三隅一成訳『行動主義心理学』白揚社がある。
- 4) H. Blumer, "What is wrong with social theory?" (1954), H. Blumer, *Symbolic Interactionism* (Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey, 1969) 所収, pp. 147-8 参照。

たいと思う。

① significant symbol⁶⁾

ミードのコミュニケーション論は、人間のコミュニケーションのなかの他の動物と共通の側面に注目しながら、しかも、人間独自の側面を浮かび上げるところからはじまる。すなわち、ミードによれば、人間は他の動物と同様に conversation of gesture (身ぶり会話)を行なう⁷⁾。無意識的に身ぶりを交わし、協同しあったり敵対しあったりするわけである。このような、原初的な社会的相互作用が発達して人間独自の段階に至ったものとして、ミードは significant symbol (有意味シンボル、もしくは、意味のあるシンボルと訳される)によるコミュニケーションを考える⁸⁾。この段階では、他の人々に引き起すであろう結果を考え、効果をはかろうとシムボルが発せられる。社会生活のなかで一定のおもみをもつことを予想してシンボルが提示されるのである。significant symbol として用いられるもののうち代表的なのはことばであるが、ことばがつねに significant であるとはいえない。おうむの喋ることばや、おうむのようにわけもわからず覚えこんで復唱され書き記されることばや、他者への効果も考えずに絶え間なく発せられるお喋り等々のなかに登場することばは significant symbol とはいえない。他方、たとえ幼児の片言やしなめ顔であっても、生身の人間に与える影響を期待しおしはかって発せられるものであるならば、significant symbol といえよう。ミードによれば、このように他の人間との関わりのなかで懸命に significant symbol を発するという経験こそ、自我の形成の基盤である。より有効に意思を伝えるためには、相手の立場をつ

かみ、相手が自分に期待するところを把握する必要が生じる。このことが、自分をひとつの客体として眺める“もう一人の自分”、“他者の立場に立つ自分”を育てる。この、自分を客体として意識することができるというところ——意識する主体でもあり意識される客体でもあるというところ——にこそ、人間の自我の特徴がある。他者に向けて、空しく宙に舞うことのない有意義な——有意義かつ有効な——シンボルを発しようとする努力こそ、自我の発達を可能にするのである⁹⁾。

② role taking

さきに、コミュニケーションを効果的なものにするためには、相手の立場をつかむ努力が必要だと述べた。このためには、コミュニケーションを行なっている時点で、自分との関わりのみに限定して相手の立場をつかむ、ということでは不十分である。一回限りの関わりしかもたない相手ならそれでもやむをえないが、持続的な関係をもつ相手であれば、その人の立場というものを時間的にも空間的にもより大きな範囲においてつかむことが必要になる。たとえば、大家族の中に育つ幼児が母親にそばに来てほしいと願うとき、やたらに声をあげても駄目である。かえって意図に反して彼女の怒りをひき出すかもしれぬ。家族のなかで、ひいては彼女をとりかこむより大きな人間関係のネットワーク——社会——のなかでの彼女の立場をつかまねばならない。彼女に期待されている役割をつかみ、その彼女が自分に期待している役割をつかむことができる。これが role taking (役割の取得またはとりいれ)である¹⁰⁾。role taking の力を身につけることは、コミュニケーション能力の

5) ここでとり上げた諸概念に関するものとしては岡部慶三「社会心理学」【心理学のすすめ】(筑摩書房, 1968, 245-276頁), より広くミードの理論を紹介したのとしては鶴見俊輔【新版 アメリカ哲学】第6章(社会思想社, 1971), 佐藤毅「プラグマティズムのコミュニケーション論」【現代日本のコミュニケーション】第一巻(青木書店, 船津衛【シンボリック相互作用論】(恒星社厚生閣, 1976), 前掲のミードの訳書の解説などを参照。なお, 船津氏の著書の末尾の詳細な文献目録をみれば, ここに記しきれなかった多くの論文をさがし出すことができる。

6) ミードの概念にはほぼ定訳があるので本来はそれを使うべきだろう。しかし, 邦訳ではぎこちなくなってしまうものが多い。これは決して訳者のせいではなく, たとえ他の訳をつくり出してみても平易なことばのなかに sensitizing concepts としてのふくらみをもたせた原語のニュアンスを伝え切れないと思う。それ故, ここでは原語のまま用いておく。

7) ミード, 前掲訳書, pp. 48-49。

8) ミード, 前掲訳書, p. 51などを参照。

9) ミード, 前掲訳書, pp. 147-149などを参照。

10) ミード, 前掲訳書, pp. 171。なお, ここでミードは言語によるコミュニケーションの他に, ごっこ遊びとゲームとを role taking の訓練の機会としてとらえている。

発達の重要な側面である。

③ generalized other

コミュニケーションの相手の数が限られている間は、role taking は一人一人の人間それぞれについて行なうことで足りる。母の役割と彼母によって期待される自分の彼割が一方にある。父の彼割と彼によって期待される自分の彼割が他方にある。父母の自分への期待は必ずしも一致しない。母はおとなしい自分を望み、父は活発な自分を望むとしても、何とか使い分けてやっていける。しかし、関わりをもつ人間の数が増し、異質な人々を多く含む複雑な人間関係の網の目のなかに入っていくにつれて、それでは間に合わなくなる。多様な多者たちのなかから、共通の、あるいは関連する要素を拾い出して総合し、他者一般というもののイメージをかたちづくらねばならない。そして、他者たちの相互作用のルールを見つけ出して集団、あるいは社会のイメージをかたちづくり、集団ないし社会のなかで自分に期待されている役割をつかみとらねばならない。このようにして、others (他者たち) を自ら generalize (一般化、総合) してはじめて、人は社会人として生きることができるようになるのである¹¹⁾。

この他者たちを generalize するという力を身につけるための訓練の機会を十分にもちうる限りにおいて、人間関係の範囲がいかにひろがろうと、いかに異質な人々との関わりが増していこうと——すなわち彼にとっての「社会」がどのように拡大し「国際社会」というようなものに生きようになったとしても¹²⁾、人間は「社会人」たりうるのである。

④ I と me

このようにして、人は他者の役割と彼らによって期待される自分の役割とを同時に把握する。いいかえれば、自分の心のなかに、何人かの具体的な他者と、それらを総合してえた他者一般とを住まわせることになる。すなわち、自分なりに「社会」というものをつかみ、その反応を予測しつつ行動することができるようになる。このことは決して、人間が他者に、あるいは社会に全面的に従

うということの意味しない。行為の主体としての自分 (I) は、まず心の中でひとりひとりの他者の、あるいは社会というものの意向を汲んだもう一人の自分 (me) に語りかける。そしてその応答を受けて心の中で他者との、あるいは社会とのコミュニケーションを重ねる。社会のなかで生きる人間にとって、「考える」とはこのようなことである。この過程を経て、主体の責任においてことばが選ばれてコミュニケーションがなされ、あるいは行為がなされる。その行為は、しばしば me のチェックをくぐりぬけた思いがけぬ要素をはらんでいる。それが個人の創造性であり、社会はこれを受けとめて変化して行くのである。me は社会の秩序の源泉であり、I は変動の源泉である。I と me の生々した対話——個人内コミュニケーションとしての思考——に裏づけられた活発な個人間コミュニケーションは、この変動を「進歩」の方向に向かわせる、とミードは信じて、このような sensitizing concepts を提示したのである¹³⁾。

(2) 現代日本社会における言語コミュニケーション能力の発達過程

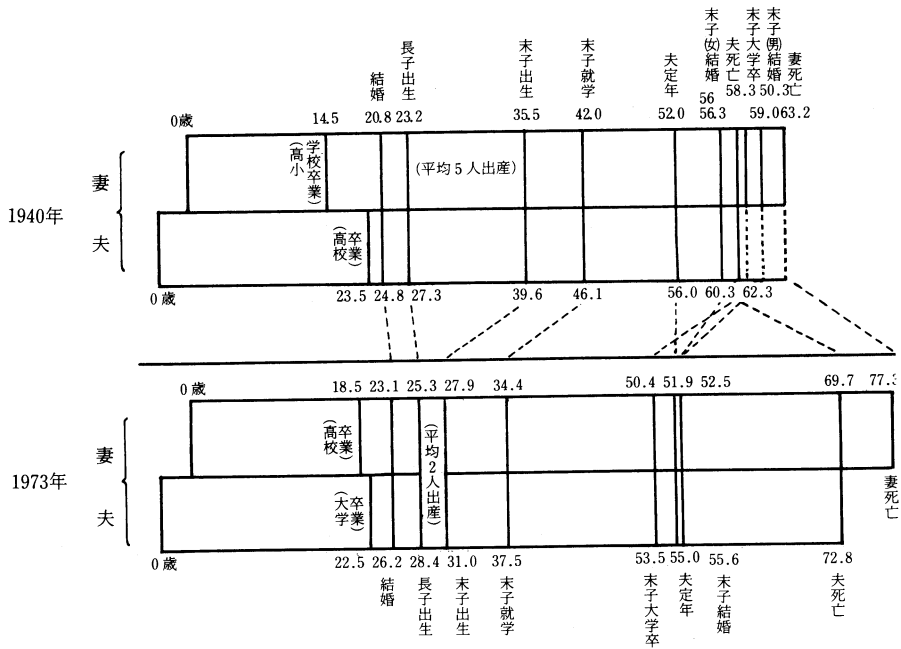
前章で述べたようなミードの考え方には、論理的な飛躍は含まれていない、と私は思う。それは確かに、コミュニケーション能力の発達過程を把握し、コミュニケーションというものが、個人にとって果しうる役割をとらえている。ただし、ミードの考え方を直ちに人間社会に——アメリカにであれ、ヨーロッパにであれ、日本にであれ、「知識人」集団にであれ、「民衆」の間にであれ——実際に余すところなく実現していることの記述とみるならば、ミードを学ぶことによって認識の目はかえって曇らされてしまう。かといって、コミュニケーションの果すべき役割についての単なる理想的な「お話」や「お説教」とみて、コミュニケーション信仰の人ミードを批判しても、そこから何もはじまりはしない。これをひとつの「理念型」とみて、社会の現実を分析し、しかるべき処方箋をさがし出すための道具のなかに加えるとき、はじめてミードの理論は現代に生きてくる。

11) generalized other についてはミードの前掲訳書 p. 98, 166-7, 209などを参照。

12) ミード、前掲訳書, p. 279, 283, 318などを参照。

13) I と me については前掲訳書の pp. 186-191, 205-227などを参照。

図1. 夫婦のライフ・サイクルのひとつのモデル (戦前と現在)



資料：厚生省人口問題審議会，日本人口の動向，のデータによる
経済企画庁，国民生活白書，昭和49年版より転載

以下，ミードの sensitizing concepts を手がかりに，現代日本における言語コミュニケーション能力の発達と，それと表裏一体をなす自我の形成過程を，家族内コミュニケーション，マス・コミュニケーション接触，学校教育におけるコミュニケーションの三側面に分けて見ていきたいと思う。

①家族内のコミュニケーション

多くの場合，人は，もっぱら母子関係のなかで人間としての歩みをはじめ。従って，言語コミュニケーション能力の発達の初期に果す母親の役割は大きい。

従来から日本では特に母子の一体的な関係が目立つとされてきたが，今日の日本社会にはそれをさらに強化するような条件がある。

図1¹⁴⁾は，各種の統計データをもとにして1940年と1973年の夫婦のライフサイクルの変化をモデルとして示したものである。産児制限の普及に

よって子ども数が平均5人から2人に減少し，しかも末子の産み上げが妻35.5歳のときであったものが27.9歳のときへと著しく早くなっているのが目立つ。このことは，一人一人の子どもに対して母親の関心が比較的長く濃密に注がれるための条件を用意していると考えられる。勿論，仕事や社会的活動に忙しく過している母親も多く，外に出て働く主婦は近年著しく増えている。しかし，その増加分の多くは中高年の主婦であり，子どもの小さい間はいわゆる専業主婦として子育てを中心に家事に専念している主婦が多いとみられる¹⁵⁾。

これに加えて，核家族化の進行によって，祖母が母親と共に育児にたずさわる，といった機会は少なくなっている。また，長子と末子の誕生時期が接近したため，年の離れた姉や兄が親代りに乳幼児に接するという機会も減っている。いわゆる「子守り」はもはや遠い昔の物語であり，学生アルバイトによるベビーシッターといった制度も日

14) 出典は表の下にある通りだが，ここでは居安正・間場寿一編『現代社会学—資料と解説—』アカデミア出版会，1978，p. 89 に転載されていたものを再転載した。なお，一々記さないが同書には多くを負っている。

15) 労働省婦人少年局編『婦人労働の実情』昭和52年版。p. 11, pp. 40-41などを参照。

本ではさほど発達していない¹⁶⁾。また、週休2日制の普及などによって労働時間が減っているとはいっても、父親の子どもとの接触時間は母親のそれに比べて遙かに少ない。それに加えて、近隣関係において相互不可侵のあっさりしたつきあい方が浸透してきていることにより、“隣のおばちゃん”といった人物が乳幼児に接触する機会も少ない。保育所は職業をもつ母親の子供を優先しているから、専業主婦の子どもたちの多くは、幼稚園に入るまでの間、他者の介入することの少ないきわめて濃密な時間を母親と共に過ごす。

このような状況は、言語コミュニケーション能力の発達にどのような影響をもっているであろうか？ 母親が子育てに専念していることに満足し、一生懸命子どもと関わろうと努力している場合についてまず考えてみよう。この場合、スキンシップによる心の触れ合いの機会は豊かにあるし、子どもが母親にことばを教えて貰う時間はあり余るほどであり、大人である母親と生活を共にするなかで子どもの知識量が増える可能性は大きい。しかし、こうしたことは、significant symbol によるコミュニケーションの能力の発達に必ずしもつながらない。母親が子どものコミュニケーション能力を育てるといふことの重要性を認識し、そのための具体的な方策をとらないと、母子関係の濃密さが却って子どものコミュニケーションに関する能力の発達を妨げる可能性もある。何故なら、相手の反応を考慮にいれて慎重に効果的なシンボルを発するという事は、次のような条件の下で行なわれると考えられるからである。① みたしたい要求があり、② そのために他者に働きかける必要があり、③ 他者の反応に不可測な要因があるため自分の方をふり向かせその注意をひきつけて願い通りの反応をひき出すための努力が必要だ、という状況がそれである。ところが、子どもとのみ関わらざるをえない状況の下では、母親はとかくこうしたコミュニケーション能力の発達のための条件をそれと知らずにこわしてしまうということが起りうる。母親がひたすら関心を子どもに向けてその一挙手一投足に注意を集中してい

るという状態のなかでは、子どもは自ら significant symbol をつくり出す必要がない。子どもの要求が起るに先立って何を要求すべきかを教え、自らそれをみだし、子どもに独自の要求が起っても、子どもからのコミュニケーションが行なわれるのを待つことなく暗黙のうちにそれを察知して直ちに処理してしまい、ことばにならない泣き声や不機嫌な表情・動作などに過剰反応を示す人物が身近にいる場合には、significant symbol によるコミュニケーションは不要である。こうした状況の下では、子どものコミュニケーション能力も育たず、自我形成も十分に行なわれないだろう。たとえこのような状況のなかで絵本やテレビなどによってことばを教えて子どもの語彙や知識をふやしたとしても、生きたコミュニケーションの文脈のなかで使われたしめめられない限り、それらの語彙や知識はコミュニケーション能力の発達とは無関係なままに終りがちである。それらは、日常生活とは無縁な趣味のコレクションのようなものとして死蔵されたままに終わってしまうと考えられる。

他方、子どもとの関係のなかだけに閉じこめられていることにいら立ち、あるいは自覚化できぬままに心の底に不満を抱いている母親の場合はどうだろうか？ こうした場合、子どもは、懸命に significant symbol をつくり出して呼びかけても、母親の感情の流れ具合のせいで適当な応答を与えられないまま放置されるといった事態にしばしばぶつかる可能性がある。また、求めもしないのに突然母親の側の都合によって猫可愛がりになれるといった事態にもぶつかるかもしれない。このように、相手の反応があまりにも不可測でその立場を察知しきれないといった場合にも、子どもは significant symbol によるコミュニケーションの能力を発達させていくための動機づけを失うだろう。

東京都荒川区の東京女子医大病院小児科で5年にわたって週一回ずつ心理相談を担当している阿部明子氏（東京家政大学教授、幼児教育）は、次のように述べている¹⁷⁾。“この一年余り、主訴の問

16) ベビーシッターのアルバイトをした経験をもつ一女子学生のいうところでは、あまり母親が子どものことを気にするのでも1日で止めたという。少なく産んで掌中の玉のように育てあげるといふ時代には、育児を素人の他人に任せるとは難かしいだろう。

題だけでなく、つぎつぎとこんなことも困る、といわれる上、お子さんに問いかけたことも自分がみな代って答えてしまうタイプ、全く自分は関り合いはないんだということをありありと示すタイプとの2つが殆どの母親にみられるようになってしまいました”と。この過保護型と無関心型ともいうべき2つの母親の類型¹⁸⁾は、いずれも現代日本社会における女性の閉塞状況が生み出したものであり、どちらも子どものコミュニケーション能力の発達を阻害しやすいと考えられる。

このような母子関係の問題状況に加えて、今日の日本の社会における父と子の関係もまた問題をはらんでいる。敗戦に伴う民主化のコースのなかで、子供にとってものがわかりが悪くこわい人物からものわかりがよくやさしい人物へと、父親のイメージは大きく変貌した。いわゆる「父なき社会」論のなかで問題にされているように、このことは、子どもに他者とのきびしい関わりへの最初の機会を失なわせることになった。確かに、問答無用の頑固な父親はしばしば子どもを絶望させ、コミュニケーションの力を育てていく意欲を失なわせる。しかし、父親の頑固さが筋の通ったものであれば、子どもは自分とは異なった立場をもった他者に立ち向かい、何とかして彼の自分に対する要求の「筋」をつかみ、これを考慮しながら自分の希望をみたとし、彼との間で有効な意味をもつシンボルをさがし求めることになる。このことが、自分と異なる立場をもった他者たちに立ち向かいつつ、彼らと対峙する自我をかたちづくり、きびしい社会のなかに生きることを学ぶ第一歩となる。父親と母親の自分に対する期待が違い、これに祖父の期待も交錯する、というような大家族のなかで育つような場合には、子どもはあれこれの他者の立場をつかみ、状況に応じて態度を使い分けて相手の期待に添おうとするだけでは間に合わない。何とか、一見多様で異質な他者たちの態度と総合して彼らに共通する家族というものの特

徴を掴み、彼らとの関わりにおいて自分というものを確立していく必要に迫られる。きびしい父親の存在や、家族のメンバー間の自分に対する期待のくい違いは、generalized other をかたちづくり、社会というものを体得していく第一歩となるのである。

これに対して、ものわりのよすぎる父親は significant symbol によるコミュニケーションの稽古台とはなり難い¹⁹⁾。また、やさしい父親が母親と一致協力して子どもの教育にあたることも、子どもにとって「幸福」であると同時に「不幸」の種をもはらんでいる。すなわち、家族の子どもに対する期待があまりにもびたりと一致しすぎている場合には、子どもは矛盾に直面しつつ他者たちの立場を総合していくという訓練の機会をもちえない。さらに、父母の協力によって教師・友人・読むべき本・接すべき放送番組などが一定の価値観の下に見事に統一されてしまうような場合には、子どもは他者たちを自ら generalize していく機会をほぼ全面的に失い、大人たちによって統合されてしまった既成品の generalized other を与えられて、これとの関わりをなかで生きていくことになる。多様な他者たちの矛盾葛藤をはらんだ社会は、この子の眼から遠ざけられ、親たちによって選ばとられた単一の価値観の人々からなる小宇宙を社会だと信じて子どもは育っていく。

このような子どもは一見他者を内面化しているように思われる。しかし、この内面化はミードのいう role taking による me の形成ということは全く違う。他者の眼で自分をとらえる機構も、他者を他者として意識する自分も彼のなかでは未発達である。すなわち、自己意識あるいは自覚——自分の状態をもう一人の自分が客体としてとらえる——という人間の自我に特有とされる働きは彼のものとなっていない。また、自分と他者との分離・相違ということを自覚しながら行なわれる I と me との対話としての「考える」という営みは彼の

- 17) 阿部明子「子どもとのコミュニケーション——ことばの概念のちがいが——」『言語生活』特集・子どものことばの世界、1975年4月号 No. 283, pp. 47-53, 引用部分は48ページ。
- 18) これらは、何か子どもに問題を感じて相談に出かけた母親たちの類型であるから、この中間に心身共にすこやかに子どもを育てている中容型ともいうべき母親が存在することはいうまでもない。
- 19) こうした父親をもつ子どもが青年期にさしかかったとき、のれんに腕押しのような父親の手応えのなさにいら立ち、暴力をふるって無理にも父親を正面にひき据えて自分に立ち向かわせようとするところがあるのは、精神科医の指摘するところである。たとえば笠原嘉『青年期——精神病理学から——』中公新書、1977, pp. 138-139を参照。

なかでは成立しない。彼の心は混然一体となっており、me も I もはつきりと姿をあらわしていない以上、両者の対話は成立しえない。

このような子どもは、自分のなかで起ってくる潜在的な欲求を自覚化することが苦手であろう。自覚しえない以上、それについて考えることも、その実現のための効果的なコミュニケーションも行ない難い。従ってその欲求は実現されることもなく、実現可能なかたちに変形されることもなく、きっぱりと思いあきらめられることもなく無意識の深層にくすぶり続ける。こうした状態が精神的な障害の源泉となることはフロイトの示したところである。近年問題化している「よい子」の突然の自閉症や登校拒否などのなかには、こうした文脈で理解することのできるものもあると考えられる。また、心因性の病氣や、自殺、非行などは、心のなかにはつきりと形をあらわすことを許されない“I”が身体をよりどころに示す、ぎりぎりのことばによらないコミュニケーションと考えることもできよう²⁰⁾。

大人たちによって generalize されてしまった other ——すでに切りとられてしまった既成品の「社会」——を与えられて育った「よい子」たちは、成長と共に「世間」をひろげていくことができず対人関係に悩むことにもなりがちである。他者の反応を予測し、読みとる機構ができていなければ、自分や家族とは異質の他者につづかつたとき意思の疎通ができない。従って、見知らぬ人々の多い広い世間へ出ていくことは恐ろしい。学校に入れば同級生との関係に悩み、都市に出れば近隣関係に悩み、職場に入れば同僚との関係に悩まねばならない。対人恐怖症といった「病」の域にまでは達しないまでも、対人恐怖に近いおびえは私たち多くの日本人にとって決して無縁ではない。対人恐怖症は日本社会に特徴的な症状として最近注目を集めている²¹⁾が、その専門家たちによれば、この症状に悩む人々は「赤の他人」や「親しい人々」の間ではあまり問題がなく、「半知り」²²⁾の人々をとくに苦手とするという。すなわち、特

に親しくはないが知らん顔もできないゼミのメンバーとか、近所の人とか職場の同僚などとの関係に思い悩むのだという。被害妄想とか体臭恐怖とかいった極端な症状は経験しないまでも、青少年期に、向うからくる隣家のあるじにお辞儀をしたものかどうか思いあぐねて下を向いて通り過ぎた、とか、ゼミのはじめに視線のやり場に困ったとかいう経験をもつ人は多いだろう。大人になればこうした悩みは薄らいでいくことが多いが、誰かが紹介して「知り合い」としての関係をはつきりとつくり上げてくれない限り、毎日顔を合わせる人々ともことばを交わしにくいといった傾向は私たちのなかにある。周知のようにこれは、定住性が高く知り合いばかりのなかに暮らしていた時代に養われた日本人の「国民性」ともいべきものである。都市化が急速に進むなかにあつて、この「国民性」は多くのトラブルをひき起している。この「国民性」が単に残存して消滅を待ち、これに代って、異質の人々との接触機会の多い現代社会の状況に合わせたコミュニケーションへの構えができつつあるというならとくに問題はない。しかし、本節に述べたような核家族の中での親子関係の緊密化という現状からすると、この「国民性」が都市化の流れに逆行して強化・再生産されているということも考えられる。今日、多くの若者たちにとって、広い社会に出ていくこと、いいかえれば、自分にとっての「社会」を自らの手で拡大していくことは、従前にも増して難かしくなっている。留年したいとか、親元にとどまりたいとか、Uターンしたいとかいう希望の増加は、そのことを物語っている。それは、一年でも早く都へ出て成功をという立身出世主義に対する人間性の回復という側面をもつと共に、自我の発達の阻害のしるしとしての側面をも併せもっていると考えられる。

other を自ら generalize するという訓練を受けることのなかった人々は、異質の人々との出会いを重ねつつ、彼らをも包み込んだより大きな「社会」というものを再構成していくことができ

20) こうした問題と子どものおかれた現代日本社会の状況(家庭、学校、社会)の関わりについては、稲村博『子どもの自殺』東京大学出版会、1978、が示唆に富んでいる。

21) 笠原嘉・藤縄昭・関口雅彦『正視恐怖・体臭恐怖』(医学書院、1972)、高橋徹『対人恐怖』(医学書院、1976)、内沼幸雄『対人恐怖の人間学』(弘文堂、1977)、などが相次いで出版されている。

22) 笠原嘉、『青年期』p. 18 参照。

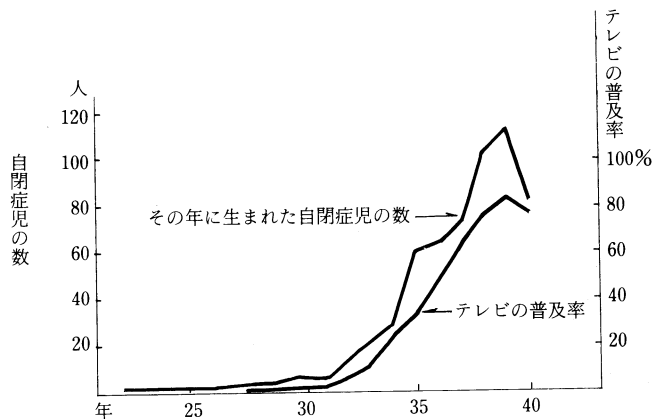
ない。それ故、家族や幼な友だちなどの馴染み深い小集団にしがみつこうとする。たとえ本人がこうした小さな殻に身をよろってそのなかで精神のバランスを保つことができたとしても、しがみつかれた他者——たとえば子ども、友人、さらには夫、妻など——のコミュニケーション能力の発達、ひいては自我の形成が妨げられるという場合もありえよう。こうして悪循環がくり返されるわけである。

②マス・コミュニケーション接触

家族とならんで、今日の日本の多くの家庭でほぼ誕生と共に子どもが接触するのがマス・コミュニケーション——とりわけテレビ・ラジオによるそれ——である。マンガなど考えるべきメディアは多いが、ここでは放送メディアに絞って考えておきたいと思う。

日本の社会でテレビやラジオの影響ということを考える場合には、狭い住宅空間でのテレビ・ラジオとの共棲ともいうべき条件を除いて考えるわけにはいかない。乳幼児期におけるこうした状態の悪影響について問題を提起したのが、岩佐京子氏（『テレビに子守をさせないで』水曜社、1976年初版、1978年改訂版）である。児童相談員としての経験をふまえて、岩佐氏は、同書の初版のなかで、つけっ放しのテレビのかたわらで乳幼児期を過すことが小児自閉症の重要な発生原因の一つとなっているのではないかという問題提起を行なった。同氏は、テレビが物珍しいものではなくなり、いわゆる「ながら視聴」の時代に入って、ほとんど一日中つけっ放しの家もあるといった状態そのものが、乳幼児に与える影響を問題にした。三歳児のための健康診断を受けにきた幼児のなかに、テレビのコマーシャルの文句をつぶやくばかりで話しかけに応答しない子を見つけたのがそのきっかけであった。傍証としては、図2²³⁾のように、テレビ普及率のカーブと小児自閉症発生数²⁴⁾のカーブとが類似のパターンをみせていることが挙げられた。テレビから流れる絶えまない音声が、

図2 自閉症の発生とテレビの普及率



人間の声を聞き分けて、これに特に関心をもって反応することを妨げる、と岩佐氏は考えた。そして赤児の側の人間への無関心は、大人の側の張り合いもなくしてしまい、話しかけられる機会が減るため、ことばの発達を遅らせるという悪循環が起っていると見た。その後、岩佐氏はこの仮説に基いて自閉症児の治療にとりくみ、テレビを完全に消すよう指導した。しかし、テレビという要因だけでは説明・治療が困難で、さらにテレビの音声と類似のラジオ・レコードなどの人工的な音刺激を含めて考えても、説明・治療しきれないケースに直面せざるをえなかった。そこで、『新版 テレビに子守をさせないで』（1978）では、環境からの物理的・音響的・化学的・物理的な刺激一般を問題にする立場をとり、テレビを消すだけでなく、つけっ放しの深夜灯を消したり、与えすぎの玩具や食物をとり去ったり、といった過剰刺激を断つことによる治療の試みを報告している。いわば、テレビからはじまって、現代生活における人工的・物理的な刺激一般にまで考察をひろげているわけである。

いわゆる小児自閉症に関して同氏の仮説が正しいかどうかを判断する資格は私にはない。しかし、私は現代社会におけるコミュニケーション能力の発達の物理的・音響的・化学的・物理的な条件を問題にしたひとつの仮説としてこの考え方に注目しておきたい。私としては、この現代生活の物理的側面に関する考察と、心理的側面についての多角的な考察とが組み合わせ

23) 岩佐京子『テレビに子守をさせないで』水曜社、1976、p. 90。

24) 「自閉症児の数」とは自閉症親の会に集まっている9歳以上の自閉症575人を出生年別に整理して示したものの、49年6月～7月の愛育研究所の調査による。

れ²⁵⁾、両側面の相乗効果が臨床的に深く追求されることを願っている。私は偶然、かつて知恵遅れを気にかけて教育相談所に通っている子どもの家庭に2年間にわたって身近に接したことがある。その子は自閉症児ではなく、ことばによるコミュニケーション能力の発達の遅れが目立つ子どもであった。その家庭について今もはっきりと印象に残っているのは、一人っ子に対するやさしくしっかりした母親のかゆいところに手の届くような心あたかな世話ぶり、母親にすべてを任せ切った物静かな父親と、当時まだ珍らしかった大きなカラーテレビである。そして、そこでよく見られていたのは、幼児向けにお姉さんが話しかけ子どもの応答を求めるといったタイプの番組であった。この種の番組は、子どもを受け手の場に据えて一方的に刺激を送り続けるといったタイプの番組よりも、子どもの能動性を引き出し、ことばの能力の訓練にもなると考えられがちである。しかし、そこで行なわれている相互作用はあくまで疑似的である。子どもが応えようが応えまいが正しく応えられたことにして番組は進行する。答が間に合わなくても、間違っても、気を散らして答え損っても、頭から無視してチャンネルを一まわり切り換えてみようとまたもとのチャンネルに戻してみても、怒ることなくにっこり笑った「人間」がいつも画面のなかにいるのである。きびしい「他者」としての人間——人間同士としてきびしくまっすぐに向かい合って相手に神経を集中したうえで significant symbol を発しないと応答してくれないし、相手のことばをきき逃したらたちまち重大な結果を生ずるとするような生身の人間——が身近にいれば、その他者によるコミュニケーションの訓練の補助手段としてテレビのなかの「人間」たちは役立つだろう。しかし、身近な人間たちがあまりにも察しよく子どもの必要を充たしてくれる場合には、テレビはコミュニケーションの訓練の補助手段とはならない。かえって、

人間の発することばを、きき逃すことのできない重い意味のあるものとして受けとめ、これに応答するという力をつけていくうえで、マイナスの役割を果すこともあると考えられる。クラッパーがかつて指摘したように²⁶⁾、マスコミの影響だけを問題にするのではなく、全体的な状況のなかで作用しているさまざまな影響源のひとつとしてメディアを位置づけるというアプローチの必要を痛感する。また、ミードの理論のことを思いながらも、上述の母子が通っている児童相談所の専門家をさしおいて助言するに足るだけの裏づけを持ち合わせぬままに過してしまった日々を思い出すとき、理論を学ぶ者と実践の現場の人々との相互作用の必要性をも改めて感ぜずにはいられない。

以上、乳幼児の、しかも発達に特に問題のあるケースに多くの頁を割いてしまったけれども、何の問題もないとされている子どもたちのコミュニケーション能力の発達や自我形成にもテレビは大きな影響を与えている。テレビが子どもを受動的にするということについては今更いうまでもないし、没入型のテレビ視聴の影響についてもさまざまな問題が指摘されてきたので省略する。ここでは、岩佐氏のはじめの問題提起にあったつけ放しのテレビあるいはラジオに絞って少し考えておこう。テレビは家族の団欒を助ける、ともいわれるし、家族から会話を奪うともいわれる。テレビのなかの「人間」が、絶えず中途半端にろくに敬意を払われることなく茶の間を訪れている状態では、たとえ会話が交わされていたとしても、それはテレビを見ながら交わされている。いわば、「ながら視聴」と同時に「ながら会話」が行なわれている。この場合、子どもの発することばは、たとえそれが懸命な努力を伴って発せられたものであっても、中途半端な生返事をもって受け流されることが多い。また、逆に熟慮の結果ではない、思いつきの、衝動的に発せられることばが、たしかめられもせず許容されてしまう場合も多いだろ

25) 岩佐氏が「話しかけ」という要因を重視しているが、同氏の説の力点は物理的刺激の方におかれている。「話しかけ」への着眼は、家族内の人間関係に関する考察として展開されるとき、さらに大きな成果をもたらすだろう(この点についてはつるまきさちこ「欠落させられてきた人間関係認識」『日本の教育、1976』現代書館、1976、pp. 52-92 が示唆に富んでいる)。また、岩佐氏が番組内容の影響に重点をおきすぎた従来のテレビの影響論議の流れとは対照的に、内容の如何をとわず「テレビがつけられている」という状態そのものの影響を問題にしたことは高く評価されるが、これと並んで内容面の考察も必要だと思う。

26) J. T. Klapper, *The Effects of Mass Communication*, 1960, NHK 放送学研究室訳『コミュニケーションの効果』日本放送出版協会, 1966, pp. 21-24 参照。

う。また、家族から発せられることばも同様であり、子どもがそれをきき損ない、きき流したとて咎められることも少ない。このようなことは、決して significant symbol によるコミュニケーションを通して自我形成を行なうという過程を促進することはない。significant symbol は人と人とが互いに真向うなかで発せられ学ばれるものであり、「ながら会話」は明らかにそれを妨げるといえよう。

このことは、中学・高校生のラジオをききながらの深夜の勉強についてもいえる。司会者たちや視聴者仲間との疑似的な相互作用に支えられつつ、少年少女や若者が夜の孤独に耐えて勉強する、ということがはじまってからすでに久しい。この種の番組は、しばしば視聴者に、彼らをいつまでも子供扱いする家族からの自立の拠点——準拠集団——を与え、若者たちだけの世界を提供する。また、こうした「勉強」形態自体、受験中心の詰め込み教育への或種の抵抗ともいえる。しかし、「ながら勉強」は、教科書やノートのなかのシンボルの意味を、考えたり調べたりしてふくらませるエネルギーを奪って、ことばをいよいよ瘦せ衰えさせ、学習をますます無味乾燥なものにする。また、「ながら視聴」は、たとえラジオのなかで重い意味を含んだことばが語られ、うたわれていても、学習の進行に合わせて都合のよいところだけをききかじり、聞いたことの意味を噛みしめる間もなく学習の世界に戻ってあとは聞き流してしまうといった習慣を育てる。ことばは、ここでもおもみを失い、意義を失ってかろしめられていく。

③学校教育におけるコミュニケーション

ことばを必要とさせないほどの家族関係の緊密化、マスコミとの共棲状態の日常化など、家庭のなかに significant symbol によるコミュニケーションの力を養うことを妨げる条件が山積しているとすれば、学校においてはどうかだろうか？ 数々の努力にもかかわらず家庭での悪条件を補充する条件が今日の学校に在るとはいい難い。

まず、授業内容に関して、伝えられるべきだとされる情報量の増加ということが挙げられる。義務教育の間に現代人の「常識」のあれこれを詰め

こもうとする結果、カリキュラムはふくらみ、生活と直接関わりのない、経験的に知ることのできない知識が、大量に教師と子どもの間を往復している。これに伴って、経験の裏づけのないことばが、定義という人間と人間の間約束ごととのみ頼ってやりとりされる。教師自身本当に会得していないことばを使って、借りものの知識を教えねばならないこともしばしばであり、その教師が本当に知っている彼ならではの内容だけを教えること——たとえば農業に詳しい教師が地理を教えるとき農業に絞って教えるというようなこと——は勿論許されない。

教育実習などを参観していると、本当にわかっていないことを教師が語るとき、生徒がそのことを敏感に感じとってしらけてしまうのがよくわかる。彼らを飽きさせず「理解」を成立させるために、教師は限られた時間枠のなかに工夫をこらす。

授業形式は、教師からの一方的コミュニケーションによる度合の大きいものと、相互作用を多用した方式に大別されるが、生徒を飽きさせないためには、後者が好んで用いられる。しかし、カリキュラムの消化に追われるなかで対話を通してあることがらを本当に理解するというかたちの授業を進めるのは至難の業である²⁷⁾。従って、相互作用をとり入れた授業は、一部の優等生に即席の発言の機会を与え、十分に吟味する時間もないままに、その回答をうけ入れ、大多数の生徒には教科書にあることばを意味もまだよくわからぬまま復唱させるといったことにとどまりやすい。教室での相互作用はしばしば疑似的であり、表面的な反応をすることの苦手な子どもが一生懸命考えて本気で反応しようとする頃には終っていることが多い。とことん一人一人の疑問に答えるだけの時間がない以上、本気で反応しても応答して貰えず、わかっているのに「わかったね」といわれて授業が進むことに子どもたちは慣れなければならない。

与えられた定義以上に説明せよといわれてもわからないまま教えこまれ記憶されて答案用紙に書きこまれることばの数々。それはあたかも学校という約束ごとのシステムのなかでのみ通用する暗

27) 林竹二氏の授業に関心が集まっているのも、今日、授業における対話の成立がむずかしいからこそである。この前後の記述については林竹二『授業のなかの子どもたち』（日本放送出版協会、1978）を参照。

号のようなものだ。それらのことばは、確かに出題者への効果を予測して発せられるという点ではミードのいう、significant symbol としての要素を備えているといえる。しかしながら、その意味が本当に経験を通して掴まれておらず、頭では一通りわかっても、行動の構えや心情的な実感を伴っていない、生活から遊離したシンボルだという点からすれば、significant という形容詞を冠するにはためらわれるものがある。こうしたことばは、教室のなかでの、試験用紙の上での約束ごとの世界のなかでは使えても、日常生活のなかでは説得力がなく効果を発揮しない。だから、試験が終ると忘れ去られる。教育が盛んに行なわれ、教室や試験場で複雑なことばがしきりに往来しても、人々の言語生活は豊かにならない。今日、多くの若者たちは、もはやかつての若者たちのように、空ろな、実感を伴わないことばで身を飾ろうとはしない。そして、教育という約束ごとの世界は暗記術でぐり抜け、日常的な語彙を増やそうとはせず、ことばの足りないところは、音楽やゲームなどを媒介にした感覚的な触れ合いで補っておく。ことばを発するのにも物憂く、一人になるのも不安だというとき、喫茶店のテーブル代わりのテレビ・ゲームが彼らを支える。ちょうど、テレビがことばを失なった家族を支えるように。

おわりに

以上、ミードの描いた理想型に照らして現代日本社会における社会化過程のいくつかの側面をみてきた。そこには、言語コミュニケーション能力の発達と、それを通しての自我形成の道筋をその出発点から妨害する要因が山積していた。

多くの人は、こんなことは今更いわなくてもわかっている、当り前だというだろう。そしてある人は、自分はこうしたありさまとは無縁だとして大衆を批判し続けるだろう。ある人は、体制を変えればすべてよくなると信じ続けるだろうし、またある人は、諸外国に比べれば日本はうまくいっているのだという点を強調し続けるだろう。

確かに、社会をこわさずバランスをもって運営し維持していく、という視点からすれば、何人か

の子どもが自閉しようと自殺しようと大学生が書物に背をむけていようと、全体としてはうまくいっているということになるだろう。しかし、個人の側からすれば問題はそう簡単ではない。一回限りの人生を生き生きと送りたいと思っても、どうしていいかわからない。自分の欲求を意識化して、社会との緊張を自覚しながらその実現のための方策を考えるという、「個人内コミュニケーション」としての思考の能力も、他者に向けて欲求をことばではっきりと表現し他者の意向を受けとめるという「個人間コミュニケーション」の能力も育っていないからである。自己と他者との、個人と社会との狭間に自分の道を選びとり、作り出していくための機構が発達していない以上、人は他者から与えられる鑄型に従って借り着に身丈を合わせたような人生を送らなければならない。こうして、身近な人々の、あるいは所属集団の期待のままにどこかみたされぬ人生を送り、子どもに期待をかけるといったことのくり返しが続いていく。親自身何がみたされないのかわからぬままに、子どもに自分の代りに充足してほしいと願うのだから、その期待は本来曖昧で無定形である。それだけに、それはしばしばそのときどきの社会の大勢に左右されて大きくふくらみ、過大なものになる。それは、往々にして子どもの生活、ひいてはいのちそのものをも圧迫する。

また、集団あるいは社会の側からみても現状を手放しで礼讃はできない。集団・社会とそれを構成する個人との緊張関係を認識し、他の集団、あるいは他の社会との緊張関係をも見定めながら、自らの属する集団・社会の向うべき方向を選びとっていくという力をもった人間が育つための道が、現状では大きく破壊されてしまっているからである。このままでは、リーダーの層の薄さから、集団も社会もやがて、思いもかけない危険な方向にのめりこんでいくということが起りかねない。

significant symbol によるコミュニケーション、とりわけ言語を significant な symbol として用いたコミュニケーションの能力を互いに育てあうことの大切さ、ということがもつこの社会で認識される必要がある。そして、そのための具

28) 現在、すでに、このような試みはあちこちで行なわれている。たとえば、自閉症児を含む障害児教育を担当している新潟県伊ヶ崎小魚沼学国園分校教師つるまきさちこ氏は、共同研究会「からだことばの会」のメンバーと共に、からだことばの二側面から人間関係のひずみを考察している。本稿は同会のメンバーから多くの示唆をうけている。

体的な方策——大がかりな政策レベルのものから
一人一人の手づくりの工夫といったささやかなもの
のまで含めて——をさがす作業²⁸⁾があちこちで行
なわれなければならないと思う。